



2008年1月18日改定版（新しい情報を随時追加しています）

南極海での「調査」捕鯨についてグリーンピースの見解・資料一覧

* 捕鯨関連の報道をされる場合には、誤報を避けるためにぜひ下記の資料をお読みいただいた上で報道していただけるようお願い申し上げます。

■ グリーンピースの見解

2007年11月18日、日本の捕鯨船団は、「調査」との名目で絶滅危惧種を含む1000頭近くのクジラを南極海で捕獲するために下関港を出発しました。グリーンピースは、21年間も続いているこの捕鯨に関して、以下のような理由から、その中止もしくはクジラを殺さない調査へと移行すべきと考えます。



「調査」の名目の捕鯨だが、その肉は洋上で箱詰め冷凍までされ、商品化され水揚げそして市場へと出回る。
Copyright: Greenpeace

- 1、南極海は、クジラ保護区として捕鯨が禁止されている海域であること。
- 2、南極海は、地球温暖化によってその生態系への影響が深刻であり、細心の注意を払って国際的に管理すべき海域であること。
- 3、鯨類の科学調査は、クジラを殺さないで行う非致命的調査で行なえること。
- 4、日本は、過去20年以上に亘り、南極海において絶滅危惧種を含む7000頭以上のクジラを捕獲しており、すでに十分なデータを取得しているべきであること。

■ 日本政府の主張とグリーンピースの主張

以下に、日本政府が主張する10の捕鯨推進理由と、それに対するグリーンピースの主張をまとめました。

	日本政府の主張	グリーンピースの主張
	調査捕鯨は、「調査」を目的とした捕鯨であり、鯨肉は調査の副産物にすぎない。	鯨肉販売による売り上げで調査主体である(財)日本鯨類研究所の運営が賄われています。つまり、クジラを殺さない科学調査を行うだけでは研究所が成り立ちません。野生動物の調査機関で、調査対象の動物の肉の販売に調査費用を依存している機関はないでしょう。また同研究所には、水産庁から毎年 10 億円の補助金と委託費が与えられ、同庁の職員の天下り先になっています ¹ 。現在、元水産庁次長が務める理事の給与は年収 1380 万円と高額で、これも鯨肉販売で賄われていることとなります。このような状況では客観的な調査を行うことはできません。
	捕鯨は日本の文化であり、その文化は守るべき。	南極の捕鯨は、1934 年にノルウェーの技術を輸入して始まりました。当時、鯨油を海外に輸出し戦争の外貨を稼ぐためにこの輸入された技術を利用して始まった南極の捕鯨は、したがって商業目的であり、日本の伝統捕鯨からはるかに逸脱した近代産業の一つです。日本の鯨食も、戦後の食料不足により国が鯨肉を日本各地へ安価に供給したのがきっかけで広まったのであって、戦前までは一部の沿岸地域のみに限られたものでした ² 。
	クジラが魚を食べつくしてしまうので、クジラを捕らなければいけない。	南極海で日本が捕鯨の対象としているクジラは、小さいエビのような形をしたオキアミを大量に食べますが、魚は基本的に食べていません。よって、南極海での捕鯨を正当化するためにこの理由は一切当てはまりません。北半球に生息するクジラは確かに魚を食べますが、クジラが魚を食べつくすことはありません。現に、現在より数倍ものクジラが生息していた 100 年前までの数千万年の間、クジラが魚を食べつくしたことはありません。現在の魚の減少は、人間による乱獲が主原因です。
	「調査」捕鯨は、国際捕鯨委員会が認めている権利だ。	確かに、「調査」のためにクジラを捕獲する権利は認められています。しかし、この条文は、調査のためにクジラを数頭捕ることを前提としているもので、絶滅危惧種を含む 1000 頭近くのクジラを 1 年間で捕獲することは、明らかに調査の範囲を逸脱しています。
	クジラの調査は殺さなければ行うことができない。	日本政府は、クジラを殺さなければならない調査を選んで行っているだけで、科学的に重要性が高く、国際捕鯨委員会が合意している非致死的な調査は意図的に重要視していません。そもそも、野生動物の調査ではその動物をできるかぎり殺さずに行うのが常識ですが、日本政府はその逆に捕獲数を増やしています。今までに調査と称して 7000 頭以上のクジラを捕獲しましたが、設定した目的をまったく達成しな

¹ 農林水産省 Web サイト <http://www.maff.go.jp/koueki/itiran/suisan/8g0007.htm>

² 「捕鯨問題の歴史社会学」渡邊洋介著 東信堂

		いまま、計画の変更も行わずに捕獲頭数を倍増し種類を増やして現在も捕鯨が行われています。
	ザトウクジラは 35,000 頭ぐらい生息するから 50 頭ぐらい捕獲しても大丈夫。	ザトウクジラは海域ごとに集団でまとまって生息しており、集団間ではほとんど交流しません。確かに、集団によっては生息数が回復していますが、特に太平洋島国近海で繁殖するザトウクジラはその回復が遅れています。南極で捕獲される際には、どのザトウクジラがどの集団に属しているかを判断することはできないため、回復が遅れているザトウクジラを捕獲してしまうことが考えられ、国際捕鯨委員会でも科学者が懸念を表明しています。また、そもそも 1986 年の商業捕鯨禁止までに 20 万頭以上のザトウクジラが捕獲されてしまったことを考えれば、生息数が数万頭ではまだまだ十分にその生息数が回復していないのがわかると思います。
	ミンククジラは 76 万頭も生息している。	この数は、2000 年まで国際捕鯨委員会（IWC）が使用していた生息数ですが、日本も加わった再調査でその半分程度しか生息していないという結果が出たため、生息数については合意ができていないのが現状で、この数字を使うこと自体が問題です。多くの科学者が、個体数の減少を指摘しており、慎重な対応が求められてきています。
	日本で商業捕鯨の再開が望まれている。	元大手捕鯨会社であるニッスイやマルハなどはすでに商業捕鯨撤退を明言しており、すでに産業は存在しません。また鯨肉消費が落ちこんでいること、捕鯨には莫大な経費がかかること、補助金を与えてやっと成立していることから商業捕鯨の再開は非現実的です。
	世界でも商業捕鯨の再開へ同意する国が増えている。	2006 年の国際捕鯨委員会で捕鯨賛成側がはじめて一つの議題で過半数をとりました。これは、アフリカやカリブ海の小国へ水産無償援助という多額の援助を与える代わりに、国際捕鯨委員会に参加してもらい日本に投票するという「票買い」を行ってきたためです。1994 年から約 1000 億円の税金が水産無償援助として海外の国々に渡りました ³ 。
	海外の国々や環境保護団体はクジラを 1 頭も殺すなどいって、感情的。それに対して、日本は科学的だ。	確かに、海外での捕鯨に対する反対の中には感情的で 1 頭も殺すなどという主張の人や団体もあります。しかし、実際には科学的な観点からクジラの保護を求めているほうがそれ以上に多く存在します。感情的な部分が意図的に誇張され、それがすべてであるような印象を与えているのです。逆に海外からみれば日本が意固地に捕鯨を推進し、感情的だと見られているのも事実です。

³ グリーンピース・ジャパン Web サイト「[日本政府による捕鯨票買いチェックリスト](#)」

■ 南極海からのライブ映像

南極海を航行中のグリーンピースのキャンペーン船エスペランサ号にはライブカメラが搭載されています。このライブカメラを通して、現在の南極海の状況をご覧いただけます。時には、エスペランサ号の周囲を泳ぐクジラを見ることもできますし、日本の捕鯨船団がエスペランサ号から目視できる距離にある時は、捕鯨船団による南極海での活動も生中継でご覧いただけます。

エスペランサ号搭載のライブカメラの映像はこちらから

<http://www.greenpeace.org/international/photosvideos/live-webcam>

■ 日本政府がグリーンピースをテロリストと呼んだことに対する反論

水産庁の役人がグリーンピースをテロリストと呼んでいる件に対し、グリーンピースは 11 月 16 日付けで、日本弁護士連合会に人権救済申し立てを行い、水産庁の管轄責任者である農林水産大臣に対してその謝罪と事実の修正を求めました。

日本弁護士連合会への人権侵害救済申立書

<http://www.greenpeace.or.jp/campaign/oceans/whale/documents/legal>

■ グリーンピース捕鯨関連資料一覧

資料名とリンク	資料解説
「南極海での海洋科学調査」 http://www.whalelove.org/raw/content/fun/1677093.pdf	グリーンピースが 2007 年末から 2008 年にかけて行う南極海での海洋科学調査について紹介。
「クジラは殺さなければ科学的調査ができないか？」 http://www.whalelove.org/raw/content/fun/1677143.pdf	日本政府はクジラは殺さなければ科学的な調査ができないと主張します。そこで、クジラを殺す致命的な調査と殺さない非致命的な調査を比較し、「科学調査」の本質についてまとめました。
「国際的に非難が高まる中、捕鯨母船の新造に数百億円？」 http://www.whalelove.org/raw/content/fun/new-nissin-maru.pdf	今年の 5 月には、日本が新しい鯨肉加工工場を持つ巨大な船（捕鯨母船）を新造しようとしていると報道されました。この捕鯨母船の新造には私たちの税金も使われると思われれます。そこで、グリーンピースは捕鯨母船の新造について日本の造船会社 23 社に対して調査を行ない、その結果をまとめました。

<p>「クジラ海道プロジェクト」 http://www.whalelove.org/tracking/</p>	<p>南太平洋のザトウクジラに関するグリーンピースと科学者とのコラボレーションによって実現した衛星を使って南半球のザトウクジラを追跡する科学調査プロジェクトです。坂本龍一さんやSUGIZOさんがザトウクジラの名づけ親になってくれました。</p>
<p>「くじらブ・ワゴン」 http://www.whalelove.org/wagon/</p>	<p>日本の文化を学びにきたスペイン人、イヴァンと、日本の若いイラストレーター、ユキのふたりが、クジラに関わる日本の各地をたずねるネットTV旅番組。クジラと人間の本当の共存の仕方を考え、人間の自然への本当の愛を見つける10話。</p>
<p>くじらブ・アニメーション「校長先生とクジラ」 http://www.whalelove.org/animation/</p>	<p>第75回アカデミー賞短編アニメーション部門にノミネートされた山村浩二監督がグリーンピースと協力し作成した短編アニメーション。クジラのノスタルジーを感じさせてくれます。</p>
<p>「クジラの生態」 http://www.whalelove.org/whales/life</p>	<p>今回の調査捕鯨の対象になるクジラなどの生態を紹介。</p>
<p>「クジラと捕鯨」 http://www.whalelove.org/whales/facts/fact1</p>	<p>基本的なクジラと捕鯨の情報を全10話で説明。</p>
<p>「日本政府による捕鯨票買いチェックリスト」 http://www.greenpeace.or.jp/press/releases/attached/at20070212.pdf</p>	<p>1994年以降に各国に与えられた水産無償援助という海外援助の合計額と授与国リスト。このリスト国の多くが捕鯨とはまったく関係ないにも関わらず国際捕鯨委員会に参加し、日本を支持する投票を行っている。</p>
<p>「佐藤のくじらブ・ブログ」 http://www.greenpeace.or.jp/campaign/oceans/whale/sato</p>	<p>海洋生態系問題担当部長のブログ。昨年のアラスカ国際捕鯨委員会の実況ブログ中継のほか、日々の活動、そして南極からの報告などを掲載。</p>
<p>「プレスリリース」 http://www.greenpeace.or.jp/press/</p>	<p>グリーンピース・ジャパンが配信するプレスリリースの一覧。捕鯨問題に関するプレスリリースもこちらからすべてご覧いただけます。</p>
<p>「日本はなぜ世界で一番クジラを殺すのか？」 http://www.whalelove.org/books/</p>	<p>グリーンピース・ジャパンの事務局長が幻冬舎新書から出版した書籍。捕鯨の問題点とその解決策を提案しているもの。</p>